

The Development of the Hand-made Paper Industry in Modern Zhejiang Province

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9654

近代浙江省における手工製紙業の展開

周 如 軍*

The Development of the Hand-made Paper Industry in Modern Zhejiang Province

ZHOU RU JIN

はじめに

近代中国の手工製紙業（土紙業）において、浙江省は重要な地位を占めていた⁽¹⁾。ちなみに、『浙江之紙業』（1930年）によれば、浙江省において生産されていた手工製紙（土紙）は、古くから有名であり、浙江省は歴史的に産紙の重要な地であったが、近代になると、製紙の名声と価値は下がってしまい、中国の製紙業においてその地位を守ることができるのは、わずかに宗教儀式用の紙箔や焼紙および包装用の草紙や粗紙だけにしかすぎなくなっていたとされている⁽²⁾。

また、同書は、機械製紙（洋紙）の輸入による土紙への圧迫に対しては、以下のような意識を抱いていた。すなわち、浙江省においては、生糸と茶葉の輸出が減少したことに対してはみな懸念を抱き、改良や救済の策を計っているが、年間生産額が2,000万元余りの製紙業に関しては、言及する人がいない。中国における今日の経済上の大患は、輸出が少ないことではなく、輸入が多いことにある。生糸と茶葉の輸出は日々減少しているものの、中国人が使用する生糸や茶葉は、未だに外国製品によって奪われてはいないが、近年、新聞・文章・書籍の印刷や学校の図書・書写から商品の包装などに至るまで、みな洋紙を使用するようになり、外国製品を取り締まるためのスローガンや宣伝ピラマでもが洋紙を用いている。そのため、近年の洋紙の輸入量は、年間5,000万両のものぼり、土紙の生産が最も盛んな浙江省でさえ、毎年4万両もの洋紙を必要としている。もし内紛が一時的に収まって平和となり、教育が段々普及するようになったら、洋紙の輸入量はさらに増えるだろう。中国では、紙の生産量は多いが、宗教儀式として祭祀や焚化のために用いられるにすぎず、教育・文化・日用の必需

品は全て洋紙に頼っている。実業を論じる者は、中国の製紙業が洋紙によって消滅されてしまうのを座視して改良や救済の策を計らないで、一体どのようにしてその利益を計るつもりなのか⁽³⁾、と。

1930年の報告書によれば、浙江省における土紙の年間生産額は2,000万元余りで、そのうち、宗教儀式用が600万元余り、書写用は300万元余り、印刷機械に用いるものは絶無であり、また、土紙の生産者は専業・兼業を合わせて12万人余りだったという⁽⁴⁾。

これまで、近代中国の土紙業については、綿業や蚕糸業あるいは茶葉に関する研究が盛んになされてきたのとはちがって、徐新吾による研究を除くと、ほとんど本格的に検討されることはなかった⁽⁵⁾。しかも、徐新吾による研究も、近代浙江省における土紙業の展開については必ずしも十分には言及しておらず、その特徴を明らかにしていない。

以上のことから、本稿を執筆する目的は、近代浙江省における土紙業の動向について県レベルにまで立ち入って可能な限り詳しく分析し、土紙の生産状況および民衆生活に密接に関連している様々な用途などを明らかにすることによって、従来の捉え方に対して批判を加えることにある。また、近代浙江省における土紙業の展開過程を明らかにすることは、近代中国における手工業全般の展開を理解するための一助になると思われる。

なお、本稿においては、史料・資料からの引用部分をも含めて、原則として常用漢字と算用数字を用いることにした。

*金沢大学外国語教育研究センター：Foreign Language Institute, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa 920-1192, Japan

1. 土紙の分類

近代においても浙江省産の土紙は100種類余りあり、製造方法・原料・用途の違いによって分類されている⁽⁶⁾。

まず、製造方法から見てみると、黄白紙・黄焼紙類・草紙類・皮紙類の4つに分類できるとされている。このうち、竹を原料としていた黄白紙類と黄焼紙類の違いは、前者は上質・純粋な原料を選び、非常に手間ひまをかけて製造していたのに対して、後者は原料が精選されず、製造方法もやや簡単だった点にあり、そのため、黄白紙類は品質がやや上等だったとされている⁽⁷⁾。

また、その原料によって、おもに3種類に分けることができるかとされている。すなわち、①苦竹・淡竹・石竹などの竹を原料として富陽県・常山県・縉雲県などにおいて盛んに生産された竹紙類、②楮・桑・雁・三椏などの樹皮を原料として余杭県・富陽県や旧嚴州府・衢州府各県において盛んに生産された皮紙類、③稲藁を原料として余杭県・富陽県において多く生産された草紙類、である⁽⁸⁾。そして、それぞれがさらに細分して分類されている(表1を参照)。

表1. 浙江省における土紙の原料による分類

竹紙	元書紙	花箋、元書、鹿鳴、京放、海放、毛辺、連紙、京辺、白箋
	黄紙	黄箋、黄焼紙、千張、段放、長辺、昌山、黄京放、黄元、二細紙、廠黄
	屏紙	南屏、金屏、溪屏、屏紙、方高
皮紙	棉紙	棉紙、參皮紙、雨傘紙
	白皮紙	桑皮紙、桃皮紙、羊皮紙
	灰皮紙	皮紙、蚕種紙
草紙	草紙	坑辺、草紙、三頂、大坊、中坊、小坊
	粗紙	厚闊、大闊、名槽、粗紙

出典) 前掲書『浙江之紙業』235～236頁より作成。

さらに、土紙の用途については、おもに宗教儀式用・書写用・包装用・雑用の4種類に分けることができるとされている(表2を参照)。そのうち、宗教儀式用の紙の大部分は黄焼紙・黄箋・塊頭・廠黄・段放・方高・粗高・鹿鳴などの黄紙であり、書写用の紙は元書・花箋・毛辺・昌山・大京放・白箋・中青などの元書が多かった⁽⁹⁾。

表2. 浙江省における土紙の用途による分類

用途	土紙の名称
宗教儀式用	鹿鳴、短長辺黄、黄焼紙、塊頭紙、廠黄、黄小京放、段放、黄箋、方高、連七、大連、南屏、千張、押頭紙、江箋、折辺、板折、粗高、馬青、徐青、松紙、連五、黄紙、六局紙、溪源紙
書写用	元書、大京放、昌山、白箋、花箋、毛辺、中青、信紙、白料、六印參、長連、譜紙、契皮紙、皮

	白紙
包装用	厚闊、南屏、六千、闊方、大坊、中坊、小坊、二細紙、筍殼紙、小紙蓬、名槽、坑辺、昌闊、三頂、粗紙、板箋、昌山、大闊紙、草紙、交白、真皮、黄箋、棉紙、油紙、參皮、四号簿
雑用	桑皮、京放、粗高、坑辺、粗連史、黄元、羊皮紙、南屏、草紙、長辺黄、海放、横大、棉皮、毛角連、雨傘紙、皮紙、屏紙、徐青、真料、溪屏、金屏、桃花紙、四連茶箱紙、參皮紙、毛長、小白紙

出典) 前掲書『浙江之紙業』237～239頁より作成。

以下において、浙江省における主要な竹紙・皮紙・草紙の原料・用途・生産地などについて整理しておきたい。

(1) 竹紙

竹紙の原料である竹料は青烤料・黄料・白料の3つに分けられ、小満節(旧暦4月3日)前後より端午節(旧暦5月5日)に至る間に採伐された竹は嫩竹(柔らかい竹)で、「俗に青烤料と称し芒種(4月19日)より夏至(5月5日)に至る間に伐せし竹は発育盛にし其肉色白きを以て俗に白料と称し夏至過ぎより小暑節(5月20日)迄に採伐せし竹は盛過ぎて老境に入らんとするものにて之を黄料と称す」という。竹紙のうち、質的に最も優れていたのは連史(連紙)・京放・京辺・放廉(放連)・元書などで、これにつぐのが松継・五千・六千・表芯・京高などで、さらに黄元・鹿鳴・段放・海放・昌山・黄尖(黄箋)・白尖(白箋)・緑尖・黄焼などがつぎ、多くは黄料を用いて稀に白料を混入していた⁽¹⁰⁾。

竹紙には元書紙・黄紙・屏紙の3種類がある。そのうち、元書紙には花箋(模様入りの便箋)・元書・鹿鳴・京放・海放・毛辺・連紙・京辺・白箋などがあり、白く、上質だった。また、黄紙には黄箋・黄焼紙・千張・段放・長辺・昌山・黄京放・黄元・二細紙・廠黄などがあり、黄色く、質的にはやや劣っていた。さらに、屏紙には南屏・金屏・溪屏・屏紙・方高などがあり、黄紙と同様に黄色く、丈夫だった⁽¹¹⁾。

元書紙には六千元書と五千元書があり、柔らかい竹で作られ、やや黄色を帯び、質的には毛辺より劣っており、富陽県や蕭山県において生産されたが、富陽県の大嶺や小嶺において作られたものが質的に最も良く、帳簿・習字・包装に用いられていた。京放紙には大京放と小京放の2種類があり、前者の原料は青烤料で、後者は青烤料に白烤料を加えて作られ、钱塘江沿岸の各地において生産されたが、富陽県において生産が最も盛んで、商店の帳簿や劣等の書画・表具に用いられた。連史紙は、その原料である竹が江西省境地域において生産され、竹に漂白粉を混ぜて造られ、蕭山県や諸暨県において生産され、扇子・便箋・書画・表具に用いられた。昌山紙は、柔らかい竹を原料とし、富陽

県や蕭山県などにおいて生産され、包装に用いられた⁽¹²⁾。毛辺紙は、旧温州府・処州府において生産され⁽¹³⁾、柔らかい竹糸で作られ、柔らかく、やや黄色を帯び、表面は滑らかで、国内各地ばかりでなく日本などにも販売され、書写・習字・書画に用いられた⁽¹⁴⁾。鹿鳴紙は白烤料と黄烤料を6対4の割合で混合して作られ、蕭山県や富陽県において生産が盛んで、段放紙は白烤料と黄烤料を4対6の割合で混合して作られ、温州において盛んに生産され、鹿鳴紙と段放紙は錫箔を製造するのに用いられた⁽¹⁵⁾。海放紙は、富陽県や蕭山県において生産され、「紙捻(水煙用)及び錫箔用紙」として用いられ、竹焼紙(俗称は千張)は、祭祀用で、臨海県・余杭県において生産され、黄焼紙は黄色で厚みがあり、箱・「冥洋坯」(祭祀用)などの製造に用いられ、余杭県・臨安県において生産された。表黄は、富陽県において生産され、敬神・焚焼に用いられた。南屏紙は、竹と稻藁を混合して作られ、旧温州府・処州府とりわけ縉雲県において盛んに生産され、祭祀・焚料に用いられた⁽¹⁶⁾。

(2)皮紙

後漢の蔡倫が製造したのは皮紙であり、皮紙は竹紙が発明される以前に製造されていたとも言われている⁽¹⁷⁾。皮紙には棉紙・白皮紙・灰皮紙の3種類がある。棉紙には棉紙・參皮紙・雨傘紙などがあり、楮・構・山藤・三極などの樹皮を原料としていた。白皮紙には桑皮紙・桃皮紙・羊皮紙などがあり、多くは桑の樹皮を原料としていた。灰皮紙には、皮紙や蚕種紙などがあり、灰色だった⁽¹⁸⁾。なお、余杭県・富陽県や旧嚴州・衢州府に属する各県において生産が盛んだった⁽¹⁹⁾。

貢川紙は、上等紙で、「衢貢及高貢の名称あり」、浙江省産の土紙のなかにおいて最も良質で、竹と雁皮を2対8の割合で混合して作られたもので、商店の領収書や銭荘の小切手に用いられた。銀皮紙は、百脚の樹皮を原料としており、とりわけ於潜県における生産が盛んで、銀元の包装に用いられた。參皮紙とも呼ばれ、その種類が多く、東陽皮や昌化皮が於潜県・昌化県・常山県・東陽県において生産され、上等紙は桑や楮の樹皮、劣等紙は皮脚料を原料としており、色がやや赤く、茶葉・銀元・絹布の包装に用いられた。參皮紙は、昌化県において生産され、優れたものは桑の樹皮で作られ、それにつぐものは皮脚に古い紙脚を混合して作られ、茶葉などを包むために用いられた。桑皮紙は桑の樹皮を原料とし、もともと日本製品に対抗するために作られたもので、紙質は柔軟で薄く、余杭・富陽において生産され、衣服(絹布)の芯・紙傘・貴重品の包装・医療に用いられた。余杭県産の杭皮紙(洋皮紙)は、改良皮紙であり、日本の東洋皮紙に対抗するために改良された皮

紙だったことから、愛国皮紙とも俗称されていたが、丈夫で厚みがあり、光沢もあり、竹と雁皮を3対7、あるいは桑皮と雁皮を3対7、或いは桑皮(あるいは楮皮)と雁皮を4対6の割合で混合して製造され、生糸商人や製糸工場が生糸を包装するのに用いた。桃花紙は、厚手のものと薄手のものがあり、樺・雁・楮の樹皮を原料として於潜県において生産され、絹のように柔らかく、しかも丈夫で、雨傘の原料となっていたために、傘皮とも呼ばれた。純皮紙(白単紙)は、富陽県において生産され、包装や油紙の製造に用いられた。珍皮や奉化紙は、鄞県や奉化県において生産された⁽²⁰⁾。

(3)草紙

上等紙の製造には用いられず、製造方法が簡単だったとされていた草紙には、坑辺・草紙・三頂・大坊・中坊・小坊などの草紙と厚關・大關・名槽・粗紙などの粗紙の2種類があり⁽²¹⁾、富陽県や余杭県において生産額が多かったとされている⁽²²⁾。

草紙は富陽県・余杭県・桐廬県において多く生産され、粗紙と細紙に分けられ、粗紙は雑貨商店や食料商店の包装用として、また、細紙はトイレットペーパーとして用いられ、さらに、最も粗悪なものは俗に紙筋と呼ばれ、石灰と混ぜたもので、建築の際に壁塗材料として用いられた⁽²³⁾。あるいは、粗紙は水分や油をよく吸収するために、商店において茶葉や食物の包装紙に用いられ、最も粗悪な紙は石灰と混合して壁の塗装に用いられた。また、闊方細草紙は、余杭・富陽・桐廬・於潜・昌化・新城などの県において生産され、包装に用いられた⁽²⁴⁾。なお、草紙のなかの坑辺紙(毛紙)は、余杭県・富陽県・桐廬県において生産され、包装紙・トイレットペーパー・女性の衛生紙などとして用いられた⁽²⁵⁾。

2. 土紙生産の動向

(1)概観

拙稿においてすでに論じたように、近代になって、浙江省は土紙業の首位の座を江西省から奪った⁽²⁶⁾。

前近代からの長い伝統を有していた浙江省における土紙業は、近代になっても単に存続したのではなく、土紙の生産地とその種類を変化させていた。すなわち、かつて土紙を生産していた県のうち、近代になって土紙を生産しなくなった県は計18県あり、そのうち、土紙の著名な生産地だった嵊県・新昌においてほとんど生産されなくなり、杭県・嘉興・鄞県においては全く生産されなくなった。杭県・嘉興・呉興は肥沃な平野部が広がっており、耕作するのに

適し、また、桑や麻の栽培が盛んになったために、土紙業が衰退した。また、鄞県は、海に面しているので、多くの人が商業に従事するようになり、庶民も漁業や製塩によって利益を得るようになったために、土紙業が消滅した。これに対して、温嶺・永康・武義・湯溪・寿昌・昌化・瑞安・平陽・泰順においては新たに土紙が生産されるようになった。江西省や福建省に隣接する県においては、江西省や福建省から製紙労働者を招いて土紙を生産するところもあった。この他に、土紙が生産されなくなった県としては、鎮海・定海・象山・寧海・蘭谿・開化・淳安・分水・麗水・青田・雲和・宣平などがあつた⁽²⁷⁾。

このような土紙生産地の変化は何を意味しているのだろうか。蚕糸業が発展した杭州市周辺の県や嘉興・呉興あるいは紹興市周辺の嵊県・新昌や土布業が発展した寧波市周辺の鄞県などにおいて土紙業が衰退している。近代浙江省において、土紙業が衰退していった地域は、大都市周辺の経済的に発展した地域であり、土紙業よりも収入の多い産業へ転業していったと見ることができる。経済的に発展していた農村では、選択の幅が広がっていたと言える。

さて、1919年の報告によれば、浙江省の製紙業については「殊に嚴州府、金華府下は其産出多大にして、頗る隆盛を極めた」とされる。一方、「寧波付近にては少量の奉珍紙及粗紙を生産するに過ぎざるを以て、其の消費せらるゝ紙は大部分福建、上海及び日本等より供給」され、日本の「製紙は其品質支那紙に比して頗る良好」だったが、「價格に於て支那紙より甚だ貴きが故に一般に生活程度低き支那人間に於ては余り歓迎せられざるものゝ如く、現今の状態に於ては廉価なる支那紙と競争するは甚だ難事に属するの觀あり」とされていた。消費された紙の数量からすると、「商店に使用する包紙を第一とし」ていたというから、近代において土紙が根強く存続したのは用途と密接な関係があつたことがわかる。また、台州地区に属する海門では「紙は素より産せず」、上海・江西・温州などから「包紙、帳簿用紙、對聯紙等」が移入されていた。さらに、温州市に属する瑞安では「土紙は寧波地方に少量の移出あり」とされ、平陽では「只南門内に劉順昌と称する製紙場あり、其製する紙は甚だ粗末なる土紙にして、包紙に使用するの外、他に用途なきが如し」とされている⁽²⁸⁾。

1928年に上海日本商業會議所が報じたところによれば、「浙江省の産紙は浙西にては杭州府属の錢江沿岸の各所最も盛にして浙東にて衢州処州両府属の各県に多し温州府属の永嘉、平陽泰順各県にも紙を産すれど処州に及ばず、台州府属の天台、仙居、及金華府属の東陽、義烏は産出更に僅少なり」という状況であり、さらに、県別に見てみると、浙江省西部の余杭・富陽・新登・臨安・昌化・長興・安吉などは「皆産紙の地なり就中富陽、余杭を以て全省産

額の冠と」なし、また、浙江省東部では「旧寧波府属を除く外の其他の旧府属は殆んど皆産紙地にして其産額に多少の別あるのみ著名なる産地は蕭山及諸暨」だったという⁽²⁹⁾。

浙江省政府設計会による1930年の調査によれば、浙江省各県における土紙の生産額は、860万余元の富陽県が最も多く、浙江省全体の41.56%を占め、これに続く蕭山県が6.53%、衢県が4.96%などとなっていた。そして、富陽県を除く、杭州市周辺地域の蕭山県・余杭県・臨安県における土紙の生産額が合計で12.38%占め、また、衢県を中心とする江山県・龍遊県のそれが合計で10.73%を占めていた（表3を参照）。

表3. 浙江省手工製紙の生産額（1930年）

県名	生産額（元）	%	地区・市
1 富陽	8,667,912	41.56	杭州市
2 蕭山	1,360,620	6.53	杭州市
3 衢県	1,034,783	4.96	衢州市
4 江山	753,336	3.61	衢州市
5 諸暨	724,450	3.47	紹興市
6 泰順	685,200	3.29	温州市
7 余杭	671,100	3.22	杭州市
8 臨安	548,028	2.63	杭州市
9 永嘉	529,644	2.54	温州市
10 黄巖	518,723	2.49	台州地区
11 瑞安	506,070	2.43	温州市
12 龍遊	454,910	2.16	衢州市
13 桐廬	405,347	1.94	杭州市
14 金華	308,640	1.48	金華市
15 孝豊	283,520	1.38	湖州市
16 新登	276,307	1.33	杭州市
17 縉雲	274,807	1.32	麗水地区
18 常山	274,800	1.32	衢州市
19 臨海	248,040	1.20	台州地区
20 武義	243,456	1.17	金華市
21 遂安	239,776	1.15	金華市
22 景寧	202,350	0.97	麗水地区
23 紹興	179,880	0.86	紹興市
24 奉化	169,050	0.81	寧波市
25 壽昌	158,400	0.76	杭州市
26 湯溪	155,420	0.75	金華市
27 上虞	127,224	0.61	紹興市
28 遂昌	110,783	0.53	麗水地区
29 松陽	108,913	0.52	麗水地区
30 温嶺	100,980	0.49	台州地区
31 嵊県	87,966	0.42	紹興市
32 永康	85,194	0.41	金華市
33 慶元	71,156	0.34	麗水地区
34 浦江	61,848	0.30	金華市

35	於潜	54,921	0.26	杭州市
36	昌化	53,248	0.25	杭州市
37	平陽	48,536	0.23	温州市
38	天台	27,052	0.13	台州地区
39	新昌	16,836	0.08	紹興市
40	仙居	8,988	0.04	台州地区
41	建德	5,400	0.03	杭州市
42	余姚	4,752	0.02	寧波市
43	安吉	2,120	0.01	湖州市
総額	20,850,487	100.00		

出典) 前掲書『浙江之紙業』301~303頁より作成。なお、孝豊県は1958年に安吉県に編入されている。

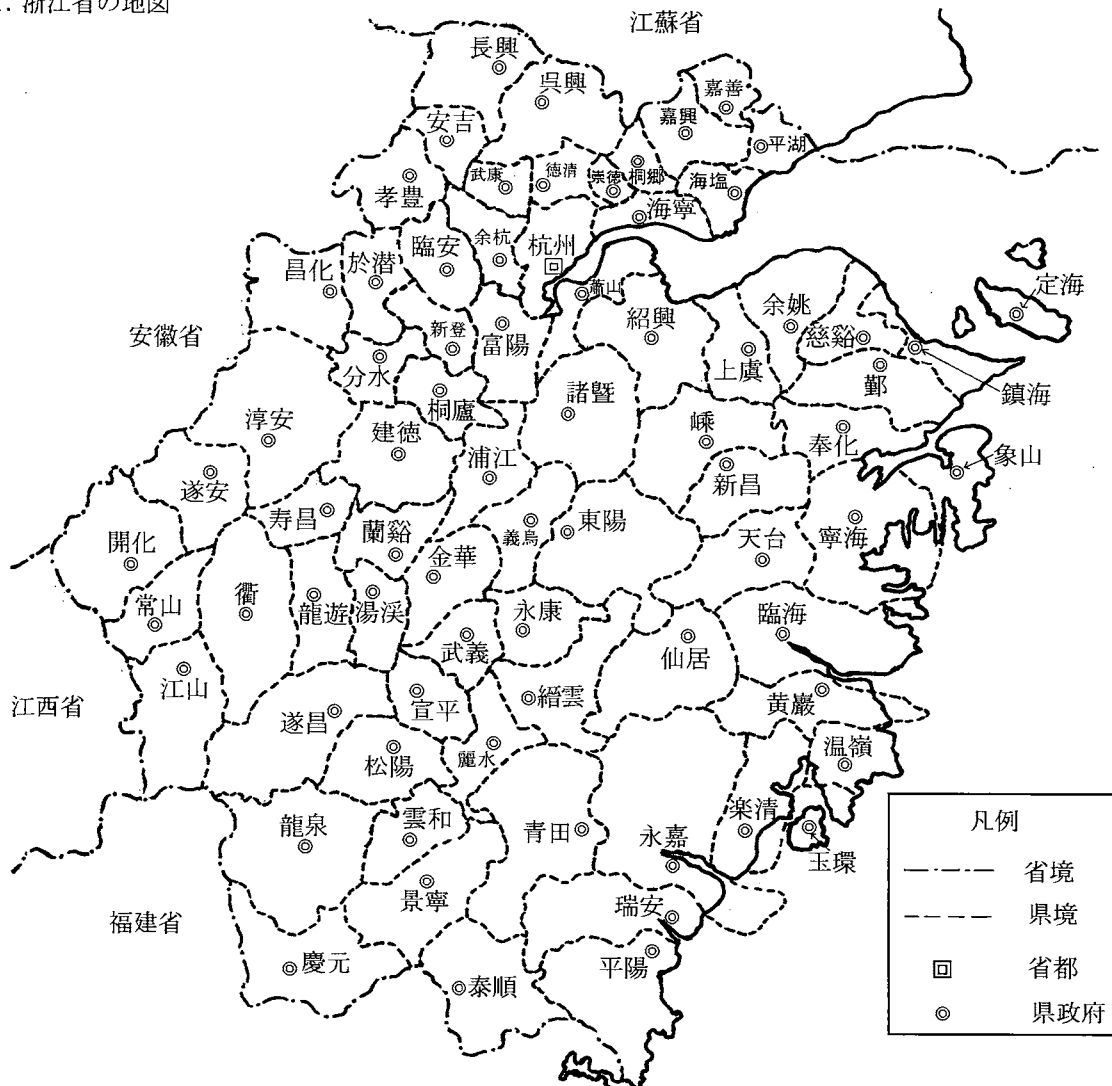
ところが、1920年代後半の調査によれば、「富陽に産する各種の紙類は民国初年には己に7、80万元の巨額に達せり近年価昂騰せるを以て噸に100万元を超過すべし余杭は毎年皮紙万余担を産す(倉前鎮最多なり) 每担売価平均約15元なれば毎年20万元の産額となり尚其他各種竹紙草紙の産額を加すれば毎年合計30万元乃至40万元となる新登、

臨安の産紙は富陽に於けるものと同一なれど唯臨安は黄燒茶白、(稻草を以て製せしもの)を盛とす毎年産額各約十数万元なり長興安吉は紙を産すれども其額甚だ少」く、蕭山県や諸暨県においては「毎年各20余万元の産額あり」としており⁽³⁰⁾、上記の浙江省政府設計会の数字と大きくかけ離れてはいるものの、富陽県が浙江省における中心的な土紙の生産地だったことだけは確かである。

このように、浙江省における土紙の生産地は各県に広がってはいたが、とくに錢塘江沿岸の各県で盛んだった(図1を参照)。そして、このような土紙生産地の偏在ぶりは、表3から見ても明らかである。

それでは、このように富陽県における土紙の生産が浙江省のなかにおいて非常に突出し、また、富陽県を含む、杭州市周辺一帯に土紙の生産地が偏在・集中していたのはなぜだろうか。浙江省において土紙業が発達した原因について、『浙江之紙業』(1930年)では以下の4点を挙げている⁽³¹⁾。

図1. 浙江省の地図



出典) 行政院農村復興委員會編『浙江省農村調査』(商務印書館、1934年)より作成。

①歴史的原因。浙江省は昔から文化が発達し、土紙の素晴らしさが知られるようになり、臨安（杭州）が南宋の都となると、紙に対する需要が増加し、製紙が盛んになった。

②経済的原因。製紙は必要な資本が少なく、技術も簡単な上に、山間部は原料の竹・楮・石灰などの入手が非常に便利で、人口が過剰で人手が多かったために、土紙業の展開に適していた。

③地理的原因。竹や木の豊富な山間部が安徽省・江西省・福建省などの主要な土紙生産地と隣接しているために、各地の製紙業が切磋琢磨して発達した。また、浙江省北部は土紙の主要な販売先となっていた江蘇省蘇州・常州などと隣接していたために、土紙の販売にとって便利だった。

④社会的要因。浙江省では、宗教的儀式のため、また主要な輸出の生糸や茶葉を包装するためにも土紙を必要としていた上に、「寧為故里乞、不為他郷鬼」という諺のように、山間部の住民は他郷に出るのを嫌がり、老若男女を問わず、昼夜兼行で製紙に励んだ。

以上のような原因が富陽県を含む杭州市周辺一帯にあつてはまっていたことはたしかであろう。例えば、余杭県において土紙が盛んに作られた原因としては、南宋の時代に臨安（杭州）が首都となって、文化が発達し、紙に対する需用量が多くなったこと、余杭県は土地が痩せており、人口が多く、労働力が過剰だったこと、昔から宗教活動が盛んだったこと、余杭県には、竹・木・石灰などの原料と動力となる水力が豊富だったこと、などが挙げられるとされている⁽³²⁾。

杭州市周辺一帯では農家の副業としてはまず第一に蚕糸業が挙げられるのであり、富陽県が土紙生産において突出していたのは農村経済構造の特質が大きく影響していたと考えられる。富陽県の人々は、農耕や養蚕を行う以外、製紙業に従事しており⁽³³⁾、富陽県で土紙業に従事している槽戸は数千戸以上にも達し、「全部が農民で農閑の副業ニ製紙スルモノデアリ、専門ノ槽戸ナルモノハナイ。是等ノ槽戸ノ中河岸ニ遠イ山中ニ居住スルモノハ主トシテ黄白紙ヲ作ルガ河岸ニ近イモノハ主トシテ坑辺ヲ造ツテ居ル。蓋シ坑辺ノ製造ニハ原料ガ稻藁デアルコト其ノ工程ニ水ヲ多量ニ要スルカラデアル。」「黄白紙ハ毛竹ヲ主タル原料トスルコロカラ毎年旧曆3、4月ノ嫩毛竹ノ出ル頃ガ、製紙ノ仕事ノ最モ多忙ナトキデアル。此ノ時分ニハ資力ノ雄厚ナ槽戸ハ2、30人モ工人ヲ雇フモノモアル。黄白紙ニトツテハ原料ノ竹ノナイ冬季ガ最モ閑デアルガ、此ノ冬季ハ又一年中デノ最モ農閑期デアルノミナラズ、秋収穫シタ稻藁ガ坑辺紙ノ主原料デアルトコロカラ此ノ坑辺紙ガ盛ニ造ラレル」とされている⁽³⁴⁾。

浙江省における土紙の生産は、ほとんど全省に広がり、年間の生産額は2,000万元以上に達している。ただし、新式の機械製紙工場は嘉興の民豊製紙工場や杭州の武林造紙公司・華豊製紙工場にすぎず、毛辺紙・竹紙・皮紙を製造しており、その他はみな手工製紙である。製紙業の従事者および製紙業によって間接的に生計を立てている人は100万人以上で、浙江省の重要な工業の一つとなっている。杭州・紹興・鄞県などで生産された土紙の多くは錫箔であった。しかも、土紙の多くは、旧法に従い、実際の需要に応じて製品を改良することができず、洋紙の流入量が年々増加していることを座視し、土紙の生産者の生計が断絶してしまうのみならず、浙江省の土紙業も破産の恐れをもたらした。最近、実業部が設立を計画・準備していた温州造紙廠は、その製品が新聞紙ではないが、将来これが完成すれば、挽回できる利権が少なくないという⁽³⁵⁾。このように、機械製紙工業の展開の必要性を強調している。

日中戦争期には、『杭州本山紙行業慣行概況』（1942年）の「ハシガキ」によれば、「杭州ニ集散スル中国土産紙」は本山紙と呼ばれていたが、1942年5月「現在杭州市デ取引サレテ居ル本山紙ハ箋屏紙（箋屏細貨トモ謂ハレル）黄白紙、坑辺紙ノ3種類ニ大別サレテ居ル。是等ノ中所謂箋屏紙トハ、箋紙、屏紙ノ謂デ何レモ嫩毛竹ヲ主要原料トシ（中ニハ麻ヲ混ゼタモノモアル）漂白用トシテ石灰ヲ和して製セラレ主トシテ省内ノ龍遊、衢州及江山地方ヨリ産スルモノノ外、福建、江西等ノ諸省ヨリ製造サレルモノヲ謂ヒ其ノ中専ラ写字用ニ供セラレル紙ヲ細貨ト謂フ。細貨ニハ主トシテ福建、江西等ノ産ノモノガ多イ。」という。「次ニ所謂黄白紙ト坑辺紙ノ産地ハ主トシテ富陽県デ」、黄白紙は「竹皮或ハ竹肉ヲ主タル原料トシ漂白用ニ石灰ヲ和シテ造ラレタ」のに対して、「坑辺紙ハ一名毛紙、又ハ草紙（稻藁ヲ原料トシタ紙ノ意）トモ謂ハレ稻藁ヲ原料トシタ黄色ノ粗造紙デアル。富陽城外ノ比較的河水ノ多イ地デ農民ノ副業トシテ年中造ラレテ居」た。そして、「富陽県ニ於ケル本山紙ノ製造ハ部分的経済的ニ種々ノ障碍モアルガ全体トシテハ事変前ニ比シ盛況ヲ呈シ例ヘバ事変前ノ生産額年1,000万元余デアツタモノガ勿論市価ノ昂騰モアルガ兎ニ角現今デハ3,000万元ニモ上ル現況デアリ農民ノ副業トシテ益々重要ナル経済的価値ヲモツヤウニナツ」たという⁽³⁶⁾。

また、『浙江省経済便覧』（1944年）では、杭県第6区は黄紙の生産で有名であり、余杭県では「黄紙、桑皮紙ヲ産シ前者年産8万担、後者ハ2,000余万枚デアル。尚又奥地ヨリ集荷スルモノモアリ主トシテ杭州ヲ経テ上海、北支ニ移出サレ」、また、富陽県の土紙も「年々杭州ヲ経テ上海、北支方面ヘ搬出サレル、ソノ量ハ莫大ナモノデ坑辺紙460塊、原斗紙233.2万塊、鹿鳴紙16.8万件、元段放紙18万件、

書紙5万件、京辺紙3万件、長辺紙10万件、黄焼紙88万塊
ソノ他26万件デア。事変後最近近ハ陸統トシテ省外へ搬
出サレタガ現在ハ自由移動ヲ許サレナイ。」としている。
その他にも、嘉興県においては7,000トンの紙類が生産さ
れ、紹興県においては紙（鹿鳴紙）の生産高は日本軍「威
令下」（占領地域）で4,300塊、「敵地区」で1.5万塊、消費
高は日本軍「威令下」で5万塊であり、諸暨県においては
紙類37,000札が生産され、「大半ハ杭州、紹興方面ニ搬出
サレ」たという⁽³⁷⁾。

（2）各県の状況

ここでは、浙江省各県における土紙業の動向を各市区ご
とにまとめて整理しておきたい。

i) 杭州市

そもそも、富陽県における紙の生産は、後漢から唐末に
至るまでは主として桑・藤・楮の樹皮を原料とする藤紙や
楮紙が生産され、魏晋南北朝時代には軟らかい竹を原料と
する竹紙が生産されるようになり、宋の時代には、竹紙の
生産技術が進歩して種類も増えていった。また、明代には
草紙（毛紙）が生産されるようになった。とくに、坑辺紙
が民衆の生活必需品となり、また、毛紙が食物の包装に使
われるようになり、生産・販売量が多くなった。やがて、
1906年、富陽県における竹紙の生産額は年間6～7万金、
草紙のそれは3～4万金に達し、民国初期から1936年まで
の間に、土紙の生産が最盛期を迎えた。ちなみに、1912
年、富陽県における土紙の生産量は、全国の25%を占め、
生産者は富陽県の全人口の3分の1を占め、1920年には、
10,069戸の槽戸があり、紙槽が18,864具あり、土紙の生産
量は118万担となり、生産額は867万元に達して、浙江省全
体の41%をも占めた。1937年に抗日戦争が勃発して交通が
阻まれると、土紙の運送が困難となり、土紙の生産も打撃
を受けた⁽³⁸⁾。

ただし、「富陽県ニオケル本山紙ノ製造ハ、部分的経済
的ニ種々ノ障害モアルガ、全体トシテハ、事変前ニ比シテ、
盛況ヲ呈シ、タトエバ事変前ノ生産額年1,000万元ニモノ
ボル状況デアリ、農民ノ副業トシテマスマス重要ナル経済
的価値ヲモツヨウニナッテイ」たとも言われている⁽³⁹⁾。
また、抗日戦争中における日本側の調査によれば、富陽県
における土紙の生産量は、「莫大なもので、坑辺紙460
塊、原闕紙233万2千塊、鹿鳴紙16万8千件、元段放紙18万
件、書紙5万件、京辺紙3万件、長辺紙10万件、黄焼紙88
万塊、その他26万件であ」った⁽⁴⁰⁾。抗日戦争が勃発した
後に富陽県における土紙の生産は徐々に回復を見せたが、
インフレなどによって大きな進展を見なかったという⁽⁴¹⁾。

富陽県南部では、毛竹や石竹を原料とする竹紙が生産さ
れ、その種類は元書・六千五千塘紙・昌山・高白・時元・

中元・海放・段放・京放・京辺・長辺・鹿鳴・粗高・花箋・
裱心など、枚挙にいとまがなく、そして、浙江省の土紙の
なかでも、富陽県の竹紙が最も良く、さらに、富陽県の土
紙のなかでも、大源の元書が最も良かった。また、草紙は、
各地で生産されたが、北部地域のものが良く、富陽県にお
いて第二の生産品となっていた。その他に、椿の樹皮を原
料とする皮紙は、西北部地域で製造され、銀洋を包むため
に使われ、桑の樹皮を原料とする桑皮紙は、西南部地域で
製造されていた⁽⁴²⁾。

蕭山県では、清末に槽戸が約1,000戸おり、生産額が数
百万元に達し、民国初期には河上・進化・戴村などにおい
て製紙業従事者が数万人に達していたが、洋紙が流入した
ために、土紙業は漸次衰退し、1930年には槽戸が510戸、
紙槽が695個、従業者が2,971人となってしまった。さらに、
抗日戦争勃発後の1939年には紙槽が382個、労働者が2,088
人、生産額は72万元余りに落ち込み、日本軍が蕭山を占領
すると、土紙の生産は全て停止した⁽⁴³⁾。

余杭県の製紙業は明清時代に最盛期を迎え、生産された
紙の種類も多く、黄白紙・黄焼紙（竹焼紙）・草紙・皮抄紙
（綿紙）などがあつたが、民国期になると、農家が生産す
る紙の大部分は竹焼紙となっていた。1912年には長樂杭北林
牧会社が24個の紙槽を備えて皮抄紙を生産し、1920年には
8軒の製紙工場が60個の紙槽を備えて2,400件（約60トン）
の紙を生産していた。抗日戦争が勃発すると、製紙業は衰
退した⁽⁴⁴⁾。

余杭県において生産された土紙の原料は、毛竹と苦竹で、
土紙生産者の多くは、もともと富陽県からやってきた農民
であり、山岳地区に定住し、土紙を生産するための作業場
を設立し、竹を原料として土紙を生産したが、やがて、製
紙作業場の所有者と労働者に両極分化した。また、当地の
地主のなかにも、製紙作業場を設立した者がいた。『中国
実業誌（浙江省）』（1933年）によれば、抗日戦争が勃発
する以前においては、槽戸が2,052戸、資本金が68,900元、
生産者が8,540人、年間の生産額が67万元で、当時の土紙
の生産量は全省で第7位だった。土紙には、帳簿や書画な
どの文化用の元書・京放、日常生活の包装用の土報、宗教
儀式用の総表・黄表・海放・熟表・大連の8種類あつた⁽⁴⁵⁾。

また、余杭県泰山郷牛肩嶺一帯にある由拳山の藤皮を原
料とした藤紙は、中国の伝統的な書道や中国画の用紙の一
つであり、光沢があり、滑らかで、色が白く、墨受けがよ
く、しかも、虫に食われないといった点に優れ、有名だつ
た。藤紙は、三国時代に由拳山の山麓で製造され、東晋時
代には書写用の紙として文人に愛用され、南北朝時代にな
ると、由拳山が質の良い藤紙の著名な産地となり、8世紀
から千年にわたって朝廷への貢品とされていた⁽⁴⁶⁾。

なお、抗日戦争中に行われた日本側の調査によれば、余

杭県は「黄紙、桑皮紙を産し、前者年産8万担、後者は2千余万枚であ」ったという⁽⁴⁷⁾。

臨安県では黄燒紙・茶白紙・大皮紙・元書紙・桑皮紙・蚕生紙が生産された。1930年12月、臨安県・於潜県・昌化県には、紙槽戸が975戸おり、紙槽が1,082個あり、6.48万件の生産量のうち、六千元書が1.34万件、桃花紙が0.66万件、海放紙が2.89万件で、生産額は65.62万元だった。1937年に抗日戦争が勃発し、土紙の売れ行きが悪くなり、生産量が急速に減少した。抗日戦争後、土紙の生産がある程度回復した⁽⁴⁸⁾。

臨安県一帯において生産された土紙には、小簾紙(黄燒紙)・黄白尖・皮紙の3種類あった。このうち、小簾紙は竹を原料とし、厚く粗悪だったが、黄白尖は毛竹を原料とし、黄紙と白紙の二種類があり、薄くて上質だった。また、皮紙は日本から輸入された皮紙の代用品として盛んに生産され、色が白く、上質で、長持ちだった。臨安県一帯において生産された土紙は、隣接する余杭県に運ばれた⁽⁴⁹⁾。

土紙の名槽と三頂を特産としていた桐廬県においても、土紙の生産は農家の副業で、曆日紙と土紙も、分水県において生産された徐青紙・銀色紙・燒紙とともに著名だった。1932年には、桐廬県においては、槽戸が1,136戸、槽位が1,172個、従業人数が5,679人で、年間200万塊の草紙が生産され、長江以南の上海・杭州及・江蘇省南部に販売された。1933年、上海勤業製紙工場が桐君山麓に30個余りの槽位を備えた工場を設立し、楮の樹皮を原料とする鋼板蠟紙を製造した。これは、上海に運ばれ、蠟を加えて蠟紙となった。ところが、抗日戦争が勃発すると、この工場は、操業停止に追い込まれてしまった⁽⁵⁰⁾。

民国初期、淳安県の農民は柔らかい竹を原料として土紙を生産していた。抗日戦争初期の1939年の統計によると、淳安県と遂昌県には、紙槽が69戸おり、花尖紙3万件、高・中把屏8,000件、高白紙5,000件、黄尖紙500件を生産し、その多くは宗教儀式に用られ、上海・杭州・蕪湖などに移出されていた。だが、抗日戦争が勃発すると、交通が阻害されて販路が途絶え、土紙の生産量も減っていた⁽⁵¹⁾。

ii) 衢州市

衢州の土紙業は300年近くの歴史を有し、1842年に5港が開港してから開港の影響を受けて発展したが、1911年に辛亥革命が勃発して民国時期を迎えると、軍閥割拠や政局の混乱などの影響を受けて土紙業の発展も阻害された。だから、1928年に北伐が官僚して東北が南京国民政府に帰順すると、全国統一によって交通の秩序も回復し、衢州の土紙も初めて海運によって東北の営口へ直接運ばれて東北への販売が激増した。こうして、衢州土紙業は最盛期を迎えた。ところが、1931年に9・18事件が勃発すると、東北市場を失って土紙の販売量が減少してしまった。衢州の土紙業の最盛期だった1929年には70万担の土紙が生産されていたが、1935年にはそのほぼ半分の約35万担にまで減少していた。日中戦争が勃発した1937年から1938年にかけては衢州の土紙業も停頓したが、その後しばらくして山間部で徐々に生産が回復していった。そして、同時に、機械製紙の流入が断絶して書写・印刷用紙などが欠乏したのを補うために、改良土報紙の生産も始まった⁽⁵²⁾。

表4を見てみると、衢州地区の土紙生産は衢県に集中していたことがわかるが、衢県においては、清代に製紙業が発展し、廟源・七里・長柱・石屏・烏溪江・上方などの山間地に「紙槽」が作られ、江西省や福建省から大量の製紙技術者を呼び寄せて、花箋・南屏・毛鹿・皮紙・元書などの紙を作り、杭州・上海・南通や華北の各地へ販売していた。日中戦争以前の最盛期には槽戸が800戸余り、製紙労働者が7,000人余りいた⁽⁵³⁾。

そもそも、衢県には、清末の最盛期に槽戸670戸余り・従業者1.1万人がおり、年間土紙生産量が4.55万トンに達し、浙江省のなかにおいては富陽・蕭山の両県について第3位の土紙生産県だった。1913年には、浙江省実業庁が龍遊県溪口鎮に改良手工造紙伝習所を設立して改良土紙を生産した。1929年には龍遊県の土紙生産量は2,695トンだった。1938年、勤業文具股份有限公司が上海から衢県官確に移転して鉄筆蠟紙を生産し、マレーシア・インドネシア・フィリピン・ブルネイ・シンガポールにも販売した。1941年、龍遊県においては紙槽350個、生産量52万件となり、屏紙生産の最盛期を迎えた⁽⁵⁴⁾。

表4. 衢州地区の土紙生産(1930年。カッコ内は1938年)

	槽戸(戸)	紙槽	従業者(人)	生産額(万元)	生産量(トン)	主な土紙
衢州全区	976	2,277	15,715	251.78(182.5)	18,169.45(2.25万)	南屏・方高
衢県	505	1,256	7,047	103.47	2,317.2(10,740)	南屏・花箋
江山	154	408	2,490	75.33	7,627.2	方高紙
龍遊	121	317	1,802	45.49	6,509.2	南屏・大小黄箋・元書
常山	196	296	4,376	27.48	1,716	花箋・棉紙

典拠)衢州市志編纂委員会編『衢州市志』(浙江人民出版社、1994年)431頁より作成。

江山県には、竹が原料の方高紙と稲藁が原料の草紙があり、方高紙は保安・廿八都、大巒口などの山間地において生産され、草紙は源口などにおいて生産された。1930年には、「紙廠」（製紙工場）が154軒、紙槽が408個、製紙労働者が2,481人おり、104,160担（1担は80刀・8,000枚）の方高紙と28,560件（1件は81刀・7,128枚）の花箋紙を生産していた。抗日戦争が勃発すると、製紙業は徐々に衰退し、1940年には4,000担の方高紙と22,000担の花箋紙を生産するにとどまった⁽⁵⁵⁾。

龍遊県においては、改良手工造紙伝習工場に続いて、1932年利文製紙工場が坑頭郷に創設され、1940年には紙槽が350にまで増加し、主に龍屏紙を生産していたが、抗日戦争中に龍遊の土紙生産量は抗日戦争前の5分の1にまで減少した。なお、龍遊県の特産品としては南屏紙と龍遊宣紙が有名だった。南屏紙は竹を原料とし、大部分は表具や障子紙・壁紙として用いたり、物を包んだり、焚きつけや宗教儀式用としても用いられ、同県東部の社陽・羅家や同県南部の溪口・靈山・廟下・大街・沐尘・梧村などにおいて生産され、蘇北・上海・杭州・山東省などへ販売された。1940年には南屏紙52万件（1件は44刀で38～40斤、1刀は100枚）が生産されたが、1942～44年に日本軍の2度にわたる侵略を受け、製紙業は破壊され、生産量は抗日戦争前の5分の1にまで激減した。また、龍遊宣紙は檀樹皮・山楡皮・山棉皮や稲藁を原料とする高級書画用紙であり、日本・東南アジア・香港・マカオなどにも販売された⁽⁵⁶⁾。

常山県においては、明清時代に製紙業が盛んになったが、近代になると、土紙業が徐々に衰退し、1932年には槽戸が296戸、労働者が4,376人で、27.48万元の花箋紙と棉紙が生産された。抗日戦争には土紙業が大幅に衰退し、1939年には花箋が3.5万捆、南屏紙が0.6万捆となり、生産額は約17万元に減少した⁽⁵⁷⁾。

iii) 温州市

温州市においては、皮紙・蠟紙・花箋・紙蓬・屏紙が生産され、民国期には「紙廠」も設立された。このうち、皮紙は棉紙・傘紙とも呼ばれ、清代に泰順県柳峰郷墩頭村では全ての家が棉紙を生産していたという。また、1935年、永嘉県城区においては棉紙の生産量が40～50万担で、それらの棉紙は温州・台州・福州へ販売され、おもに紙傘の原料となった。1937年に温州の西山に創設された大明振記紙廠は、奉化県から蠟紙の製造技術を導入し、1942年に温州大明実業廠と改称し、この間に中国・光華・建国の3つの蠟紙工場が開設され、蠟紙の原紙を生産した。1939年に永嘉県城区東門垵児村に設立された大明印刷拖蠟部は、蠟紙の原紙を蠟紙に加工し、温州における蠟紙の生産の嚆矢となった。1942年に県城区には蠟紙工場が大明・中国・建国・世界・大同など5軒あった。花箋の生産量は、1938年に泰

順県が8,000件、1929年に平陽県が3,000件に達した。同じく竹を原料とする屏紙には四六屏（南屏紙）・六九屏・二細・方糕など20種類あり、四六屏はおもに衛生・包装に用いられたほかに宗教儀式用にも用いられた。屏紙の生産地は永嘉県の三溪・藤橋や瑞安県の陶山・湖嶺などの山間部で、槽戸が1万戸余りに達した。屏紙は三溪（郭溪・瞿溪・雄溪）が集散地となっていたために、三溪土紙とも呼ばれ、上海・天津・青島・厦門などへ運ばれた。屏紙の生産量は1936年に最多の36.2万担に達し、そのうち、永嘉県は28.5万担だった。1928年には瞿溪に製紙工場が設立され、土紙の改良が試みられたが、失敗に終わり、同年における屏紙の生産量は、瑞安県が10万担で、永嘉県が9.6万担、平陽県が1.5万担だった。さらに、稲藁を原料とする紙蓬は粗紙とも呼ばれ、温州の各県において生産され、1939年に平陽県においては720トン生産された⁽⁵⁸⁾。

泰順県（温州市）においては、明清時代には花箋紙・方紙（宗教儀式用の紙）が生産され、1938年に「紙廠」が148軒あり、土紙の生産者が537人いた。また、同年に花箋紙の年間生産量が1.75万担に達した⁽⁵⁹⁾。

iv) その他の地域

諸暨県（紹興市）においては、明清時代に製紙業が発展し、藤紙・茶白紙・連五紙・連七紙・黄皮紙・草紙・黄紙・桑皮紙などを生産していた。1884年に6軒の「紙廠」において年間3,200担の土紙を生産していたが、1930年には1,102の紙槽と6,166人の労働者で、17.62万担の土紙を生産していた⁽⁶⁰⁾。

台州地区の黄岩県富山郷大畚村においては、60戸余りがおもに大畚紙（中青紙）の生産によって収入を得ていた⁽⁶¹⁾。また、臨海県においては、明代には毎年50万枚近くの土紙が貢納されていたが、民国期には包装用の皮白紙や稲藁を原料とする宗教儀式用の千張紙が作られるにすぎなくなり、1930年には槽戸234戸、紙槽234個、年間生産量は、千張紙が1万件近く、中青紙が1.8万件にすぎなくなっていた⁽⁶²⁾。さらに、北宋初期に青竹・桑皮・山麻皮・笋殼などを用いて玉板紙・花箋紙・南屏紙・長連紙・小白紙・譜紙・皮紙を製造していた天台県においては、民国初期になると、296戸・699人が製紙業に従事し、県政府は1933年に北山区大同郷風箱廟に手工造紙簡易場を開設して「火紙」（火付け用の紙こよりで、硝石を塗った粗い紙）を生産すると同時に、石橋慈聖村には製紙工場を設立して「土報紙」（旧式の粗い新聞用紙）を生産した⁽⁶³⁾。

1922年における金華市各県の土紙業は、金華県が最も盛んだった（表5を参照）。これらの土紙の多くは、包装・衛生・宗教儀式に用いられ、遼寧省・吉林省・黒竜江省・河北省・山東省・江蘇省・上海・江西省などにも販売された。日中戦争期には、蕭山県などから製紙業従事者などが

やってきて生産技術の改良を進め、生産される紙が龍屏紙・黄標紙から毛辺紙・緑板紙・白板紙に変わり、品質も高まったが、その後、石灰の価格が高くなり、採算割となると同時に、輸入紙のダンピングも加わり、土紙業は衰退していった⁽⁶⁴⁾。

表5. 1922年における金華市各県の土紙生産状況

	槽戸数	紙槽数	資本(元)	労働者数	生産額(元)
金華県	422	422	44,648	1,266	308,642
永康県	16	32	19,647	240	85,194
武義県	32	64	39,068	448	243,456
浦江県	45	115	47,242	555	61,848
湯溪県	45	90	23,112	720	155,480
合計	560	723	173,717	3,229	854,560

典拠)金華市地方志編纂委員会編『金華市志』(浙江人民出版社、1992年)537～538頁の表より作成。

金華地区は唐宋時代に上細黄白状紙・皮紙・尺白紙が生産され、中華民国時期には、嚴州や衢州とともに、浙江省における製紙の三大地域となり、大小帘粗紙・細粗紙・南屏・黄箋などの土紙が生産され、包装や衛生・宗教儀式に用いられた。1929年、金華県では1万件の草紙を生産し、湯溪においては黄箋・白尖・南屏を合計5万件生産していたが、その後、農村における土紙の生産は減少した⁽⁶⁵⁾。

清朝光緒年間に永康県(金華市)永祥の農民は当地の豊富な毛竹を用いて土紙を製造し、毎年75,661枚の白紙と2,955枚の黄紙を献上していた。1929年、製紙坊が15戸、就業人数が280人余り、年間生産量は龍屏紙と黄標紙が2万担で、遼寧・吉林・黒龍江・山東・江蘇などの諸省に売られていたが、抗日戦争期には毛辺紙・緑報紙・白報紙の生産に転換した⁽⁶⁶⁾。

元代に奉化県(寧波市)岩頭などにおいては土紙を製造し、1514年に棠岙村においては竹を原料とする土紙を製造していた。清朝康熙帝の時代には、箭岭村で生産された真皮紙が有名だった。1911年になると、棠雲村に手工造紙坊が興された。梁家墩村においては、1922年11月に設立された三星製紙工場が毛六や毛辺紙を生産し、年間200金の利益を上げていた。1927年に箭岭村では、新製品が作られ、大量に蠟紙が生産された。1930年には、180戸1,406人が黄白紙・皮紙・草紙の生産に従事し、紙槽は265具、固定資本は2.13万元、生産額は1.69万元だった。大橋龍潭村においては、1932年に12具の紙槽と40人余りの労働者を擁する光業鋼筆蠟紙工場が設立され、蠟紙が毎日4,000～5,000枚生産され、1936年には、紙の生産量は562トンとなり、生産額も20万元に達した。さらに、1938年には、方橋龍王塘に民豊製紙工場が設立され、紙の生産量は4,100件で、生産額は336万元だったが、1939年には生産量は1,940件、生

産額は2.14万元に減少してしまい、1949年には、就業者が235人、紙の生産量が164トン、紙の生産額が10万元となった⁽⁶⁷⁾。

余姚県(寧波市)においては、姚黄という竹で作られた土紙が有名で、1933年、槽戸は2戸、製紙に従事する労働者は12人で、資本金は2,488元、年間生産額は4,752元に達した。1949年、溪屏・黄白紙・雑用紙という3種類の土紙が生産され、年間生産額は約1億元だった⁽⁶⁸⁾。

以上のように、浙江省においては抗日戦争が勃発すると、日本軍の侵略を受けて製紙業が衰退するところが多かったが、日本軍の直接的な侵略を受けなかった地域においては、むしろ製紙業が発展するところもあった。

おわりに

浙江省においては土紙業以外にも蚕糸業や綿業などの多くの産業が発展したために、浙江省農村経済における土紙業の位置は必ずしも高くなかった。

近代の浙江省における土紙業の特徴は、土紙の生産地が浙江省内の各県に広がっているとは言え、生産額から見ると、富陽県が圧倒的な地位を占め、富陽県周辺地域に偏在していたことである。富陽県においては、土紙業が農村経済構造の主要な部分を構成して農家経営を支えていた。

また、浙江省における土紙の生産は、1930年代には江西省に代わって首位を占めるようになったが、土紙の生産地には大きな変遷・興亡が見られた。そのような変化は、近代浙江省農村経済の変化・発展と密接に関係していた。土紙業よりも収益の多い他の副業に従事することができるようになった地域においては、土紙業を放棄して転業していったのであり、それが不可能な地域においては土紙業に固執せざるをえなかった。そして、日中戦争が勃発すると、日本軍の軍事攻撃を受けた地域においては土紙業が大きな打撃を受けたが、日本軍の軍事侵略をまぬかれた奥地においてはむしろ土紙業が発展し、改良土紙を生産することによって不足する機械製紙を補っており抗日戦争の経済的基礎の一翼をになっていった。

近代においても土紙の生産がおもに農村部において行われていたことから考えれば、各地域における土紙の生産は、農村経済の動向と密接な関係にあったことは明らかである。近代中国における農村手工業は近代工業への連続性ではなく、農村経済の一部として位置づけるべきである。

注

(1)この点については、拙稿「近代中国における手工製紙業の展開」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所『地域総合研究』

- 第35巻第1号、2007年9月)を参照していただきたい。
- (2)浙江省政府設計会編『浙江之紙業』(1930年)178頁。
- (3)同上書『浙江之紙業』序四(羅喜聞)1～2頁。
- (4)同上書『浙江之紙業』序二(李煜瀛)2頁。
- (5)これまでの近代中国における土紙業に関する研究については、拙稿「近代中国における在来製紙業に関する研究と資料について」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究叢報』第29号、2007年3月)を参照していただきたい。
- (6)前掲書『浙江之紙業』232頁。
- (7)同上。
- (8)「浙江省の紙業」(上海日本商業会議所『経済月報』第18号・第2巻第6号、1928年6月)31～33頁。
- (9)前掲書『浙江之紙業』236頁。
- (10)前掲「浙江省の紙業」32頁。
- (11)前掲書『浙江之紙業』234頁。
- (12)同上書『浙江之紙業』31頁、前掲「浙江省の紙業」32～33頁。
- (13)同上書『浙江之紙業』242頁。
- (14)徐新吾主編『中国近代造紙工業史』(上海社会科学院出版社、1989年)22頁。
- (15)前掲書『浙江之紙業』242頁、前掲「浙江省の紙業」33頁。
- (16)同上書『浙江之紙業』31～32頁、前掲「浙江省の紙業」32～33頁。
- (17)中支建設資料整備委員会(上海・興亜院華中連絡部内)前掲書『製紙工業報告書』編訳叢報第23編(1940年)8頁。なお、原典は全国経済委員会『製紙工場報告書』経済専刊第7種(1936年)である。
- (18)前掲書『浙江之紙業』234～235頁。
- (19)前掲「浙江省の紙業」31頁。
- (20)前掲書『中国近代造紙工業史』24～25頁、前掲「浙江省の紙業」31～33頁、前掲書『浙江之紙業』34頁。
- (21)前掲書『浙江之紙業』235頁。
- (22)前掲「浙江省の紙業」31頁。
- (23)同上「浙江省の紙業」34頁。
- (24)前掲書『中国近代造紙工業史』26頁。
- (25)前掲書『浙江之紙業』35頁。
- (26)前掲拙稿「近代中国における手工製紙業の展開」。
- (27)前掲書『浙江之紙業』157～165頁。
- (28)東亜同文会『支那省別全誌』(第13巻・浙江省、1919年)697～701頁。
- (29)前掲「浙江省の紙業」31頁。
- (30)同上「浙江省の紙業」31頁。
- (31)前掲書『浙江之紙業』155～156頁。
- (32)仲志孝・豊国需「余杭土紙」(『余杭文史資料』第5輯、1989年12月)122～123頁。
- (33)魏頌唐編輯『浙江省經濟紀略』(1929年)富陽県、8頁。
- (34)満鉄・上海事務所調査室『杭州本山紙行業慣行概況』(1942年8月)7頁。
- (35)葛綏成編『分省地誌・浙江』(中華書局、1939年)116頁。
- (36)満鉄・上海事務所調査室『杭州本山紙行業慣行概況』(1942年)5～6頁・9頁。
- (37)浙江省連絡部第二科編『浙江省經濟便覧』(1944年12月)181～189頁・205頁・224頁。
- (38)富陽県地方志編纂委員会編『富陽県志』(浙江人民出版社、1993年)369～370頁。
- (39)前掲書『杭州本山紙行業慣行概況』9頁。
- (40)浙江省連絡部編『浙江省經濟便覧』(1944年12月)183～185頁。
- (41)前掲書『富陽県志』369～370頁。
- (42)清・汪文炳等『光緒・富陽県志』(光緒32年)巻15風土・物産・貨之属、14頁。
- (43)蕭山県志編纂委員会編『蕭山県志』(浙江人民出版社、1987年)346～347頁。
- (44)余杭県志編纂委員会編『余杭県志』(浙江人民出版社、1990年)306頁。
- (45)前掲書『浙江省經濟便覧』182頁。
- (46)黄世沢「由拳山藤紙」(『余杭文史資料』第5輯、1989年12月)120～121頁。
- (47)前掲書『浙江省經濟便覧』182頁。
- (48)臨安県志編纂委員会編『臨安県志』(漢語大詞典出版社、1992年)259頁。
- (49)「臨安一帯之土紙業」(『工商半月刊』第2巻第16号、1930年8月15日)14～17頁。
- (50)桐廬県志編纂委員会編『桐廬県志』(浙江人民出版社、1991年)218～219頁。
- (51)淳安県志編纂委員会編『淳安県志』(漢語大詞典出版社、1990年)307頁。
- (52)葉元椿「建国前の衢県紙槽業」(『衢州文史資料』第4輯、1988年4月)23～32頁。
- (53)衢県志編纂委員会編『衢県志』(浙江人民出版社、1992年)196頁。
- (54)衢県市志編纂委員会編『衢州市志』(浙江人民出版社、1994年)431～432頁。
- (55)江山市志編纂委員会編『江山市志』(浙江人民出版社、1990年)202頁。
- (56)龍遊県志編纂委員会編『龍遊県志』(中華書局、1991年)239頁・276～277頁。
- (57)常山県志編纂委員会編『常山県志』(浙江人民出版社、1990年)239頁。
- (58)温州市志編纂委員会編『温州市志』(中華書局、1998年)1,153～1,156頁。
- (59)《泰順県志》編纂委員会編『泰順県志』(浙江人民出版社、1998年)298頁。
- (60)諸暨県志編纂委員会編『諸暨県志』(浙江人民出版社、1993年)287頁。
- (61)王祿鑫「工商小史五則(一・大吞紙小記)」(『黄岩文史資料』(第10期、1988年5月)184～185頁。
- (62)臨海市志編纂委員会編『臨海県志』(浙江人民出版社、1989年)359頁。
- (63)天台県志編纂委員会編『天台県志』(漢語詞典出版社、1995年)246頁。
- (64)金華市地方志編纂委員会編『金華市志』(浙江人民出版社、1992年)538頁。
- (65)金華県志編纂委員会編『金華県志』(浙江人民出版社、1992年)223頁。
- (66)永康県志編纂委員会編『永康県志』(浙江人民出版社、1991年)212頁。
- (67)奉化市志編纂委員会編『奉化市志』(中華書局出版、1994年)283～284頁。
- (68)余姚市地方志編纂委員会編『余姚市志』(浙江人民出版社、1993年)346頁。